2001年

佛學研究論文集

# 人間佛教

❖財團法人佛光山文教基金會❖

2001 年

佛學研究論文集

# 人間佛教

❖財團法人佛光山文教基金會❖

# 2001年佛學研究論文集—人間佛教

## 2001年（民90）年10月初版

創 辦 人◆星雲大師
發 行 人◆釋慈惠（張優理）
主　　編◆財團法人佛光山文教基金會
法律顧問◆舒建中、毛英富
出 版 者◆財團法人佛光山文教基金會
840 高雄縣大樹鄉興田村興田路 153 號
TEL：(07)6561921~8
FAX：(07)6561573
E-mail：fbce@mail.fgs.org.tw
流 通 處◆佛光山寺
840 高雄縣大樹鄉興田村興田路 153 號　(07)6561921~8
◆佛光書局
801 高雄市前金區賢中街 27 號　(07)272-8649
100 台北市忠孝西路一段 72 號 9F 之 14　(02)2314-4659
100 台北市汀州路三段 188 號 2F　(02)2365-1826
241 台北縣三重市三和路三段 117 號　(02)2984-9523
印　　刷◆百晟文化出版印刷有限公司　TEL：(07)8151226
劃撥帳號◆41470738　帳戶：財團法人佛光山文教基金會
定　　價◆300 元

有著作權　請勿翻印　歡迎流傳

# 總序

星雲

佛光山自1967年開山以來，於今匆匆將近十載，深感時代日新月異，社會變化萬千，吾等佛子，所負化導時代之使命，所擔淨化社會之責任，實益形重要。試觀當今之世，功利主義，火燄高張，縱欲思想，漫延散布；邪惡抬頭，正義隱退。目前世界人心，急切需要佛法精神，給予安定之力量；社會大眾，急切需要佛法之眞理，給予指導之原則。故吾人在許多內修外弘之計畫中，先行發行一份有內容、有分量之學報，提供給有識之士，作爲本山開山第十年之獻禮，此其出書原因之一。

佛教發源於印度，卻光大在中國，佛法與我國文化，早已融會貫通；佛法與中國民眾生活，早已契合爲一。佛教由中國進而再傳至日本、韓國、歐美等國。今日世界各地，探討漢學之社團，研究佛學之風氣，猶如風起雲湧，佛法已不再是孤單地盛行在亞洲，佛法已爲全世界人類所接受。故吾人應認清世界眾生之需要，調和東西文化。明言之，即是以東方佛學之宗教觀，指導西方科學文明之方向。故吾人在莊嚴道場、淨化人心之餘，亟思出版一份爲世界學術界所能接受之刊物，作爲本山開山第十年之獻禮，此其出書原因之二。

本書發行之主旨已如上說，關於本書之內容擬從下列六原則著眼：

第一：培養佛學研究之風氣。

第二：發揚經論內涵之眞義。

第三：啓迪佛學新知之發現。

第四：溝通佛教宗派之見解。

第五：運用現代治學之方法。

第六：介紹佛教思想之著作。

茲將此六條目分述於後：

第一、培養佛學研究之風氣——吾人翻開歷史，可以看出唐宋時代佛法之所以隆盛，固由於有修有證之諸大師輩出，但士大夫之競相研究佛學，亦爲重要原因。今日我國各大專院校，皆有佛學社團之組織，知識分子研究佛學，已非常普遍；佛教青年，亦以進入佛學院研究佛學爲主要志向；出版界也以印行《大藏經》及各種佛教參考書爲主要任務；本書之發行，亦旨在有助於研究佛學風氣之培養。

第二、發揚經論內涵之眞義——《大藏》數千卷，歷代大師依經造論，以論演繹慧學，經論猶如發掘不完之寶藏。一部五千餘言之《金剛經》，能有數百家註釋；一本《六祖壇經》，經錢穆博士推爲研究中國文化必讀之書。龍樹論師依《般若經》而著《大智度論》，部帙百卷之《大智度論》，幾可成爲學者窮畢生精力而探討之寶典，遑論其他數千卷之經、律、論專書？吾人希望今日學界，在無邊法海中，能多產生一些《大智度論》，或如我國之《肇論》、《宗鏡錄》、《摩訶止觀》、《大乘義章》等一類著作，使經論內涵之眞義，更見發揚。

第三、啓迪佛學新知之發現——聞近弋世界高等學府，爲取得碩士之學位，必須對所學內容有眞正體認，但博士學位之取得，則必須對所學有新發現。而在佛學領域裡，亦有許多新

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

知待吾人去發掘。道生大師，即係在《涅槃經》未傳我國前倡導闡提亦有佛性之說，所謂「生公說法，頑石點頭」，乃成爲千古美談；禪宗諸大德，燈燈相傳，所謂南頓北漸，一花五葉，許多公案，許多發明，爲中國佛學寫下多采多姿之一頁。所以佛學新知之發掘，有待吾人努力耕耘。

第四、溝通佛教宗派之見解——不容諱言，中印佛教之思想學說，各家有各家之說法，各人有各人之立場，禪與淨之不容，兩宗學者一直在彼此非難，我們希望有調和兩派學說之永明大師出現；大小乘之相爭，兩派人物，各守立場，互論是非，我們希望有各宗兼弘之太虛大師應世；其他如顯密之不調，新舊之不和，空有之論爭，性相之短長，處處都需要具包容性之大德來融會貫通。佛教宗派之間，應彼此建築在互相尊敬上。因爲你我所信，均是佛陀一代時教，江河分歧雖多，但流入大海，均成一味。佛教已不容彼此非議和爭論，一切學派，一切聖典見解之溝通，實爲今日學者應有之態度與雅量。

第五、運用現代治學之方法——佛教學者已不能再固步自封，抱殘守缺，永遠停留在古老之註疏式研究領域之中。佛法應用現代科學之治學方法來研究，來發揚。在這一方面，日本佛學界，已比吾人先邁開了腳步。我國經論典籍之出版，至今尚少分段標點供人閱讀，乃使有心探討佛法者難以覓得津梁。古老解經釋論之方法，已不易爲現代青年人所接受，故佛教急待具現代知識素養之學者，運用科學方法，有組織、有系統、有歸納、有演繹地加以研究。配合現代學術思潮，運用現代知識語言，這才是傳播佛學之不二法門。

第六、介紹佛教思想之著作——今日社會，是一效率競賽

之社會，一切講究爭取時效，故亟需有人將有價值、有思想之著作，扼要地介紹，以使後學者能進一步深入義海。佛學原有典籍在數量上已使有心研學者望而生畏，新出版著作又良莠不齊，故先進者對佛學思想之導引與介紹，實爲今日當務之急。吾人願意在此一方面對讀書大眾提供些微之貢獻。

本書，因佛光山爲1967年5月16日破土開山，故每年在此開山紀念日之前出版一次。園地公開，歡迎佛教學人發抒高見，共同來莊嚴佛學思想。但本書同人雖有運悲智之心，惜才疏力拙，恐有所未逮，還望十方智德之士，有以教之，實深企盼。

1977年5月15日於佛光山

# 序——《佛學研究論文集》出版緣起

1951年初，剛接觸佛教時，在宜蘭念佛會領受星雲大師的法益；1959年，我們幾個年輕人跟隨大師到三重成立佛教文化服務處，專辦佛教書籍文物的出版流通，乃至後來到高雄壽山寺辦佛學院及佛光山的開山，這幾十年，大師一直孜孜爲念的就是佛教的文化、教育；期以教育培養人才，以文化爲薪傳弘法利生，而這都是窮畢生之心力，非一朝一夕能看到成績的事業。

由於大師本身即以文教起家，他最能體諒文人、學者的辛苦。儘管自己非常拮据，給予學者皆是最優厚的禮遇，無非是希望能爲佛教留下些學術文化資產。因此，1977年，我們發行了第一份《佛光學報》，作爲佛光山開山十年的獻禮，也希望這是一份夠水準，國際學術界都能接受的刊物。

1989年，佛光山更將首次全省行腳托鉢款成立了文教基金會，每年舉辦各種學術會議，鼓勵研究佛學論文發表，贊助學術研究、文化事業、公益活動。這幾年又收集了不少新的論著，在學眾殷殷的企盼、敦促下，現在特別將過去已有的學報從新校正、排版，並收錄近年的新作，編寫《佛學研究論文集》，以方便更多學術研究之用。

看到這些書即將付梓，內心不禁頗爲感懷，茲以當時因緣爲誌，代爲序。

# 編輯旨趣

人間佛教是佛陀出世的本懷，重視對眾生的濟度，現代生活品質之提昇及人際關係。元月八日至十日的「人間佛教學術研討會」開幕典禮上，星雲大師說：「二十一世紀是人間佛教的世紀，人間佛教世紀的來臨，希望讓眾生在佛教裡得到法喜，讓心胸更寬闊。」

這次邀集美國、日本、大陸、台灣等地佛教學者，共同探討「人間佛教」之發展，以期在新的時代，人間佛教能有更寬廣、更契合眾生所需之弘法方向。會中，專題部份有：前田惠學「世界人類的和平與共生」，教導人類和自然共同一體，實現「山川草木皆悉成佛的人間淨土」。鎌田茂雄在專題中也提到：廿一世紀中國佛教的實踐理念，就是人間佛教。鄭石岩更從現代心靈生活的適應能力，提出精湛之看法與啓示。尚有十六篇論文，一一從「人間佛教與現代生活」的角度深入探討，讓現代佛教的應世智慧，更深入民間而普及化。

這次研討會，不僅是學術性，更具有宗教及國際之特性，範圍涵括宗教、哲學、教育、文學、歷史、心理、管理、資訊、女性學的範疇，對於「人間佛教」未來之發展有更深遠之影響。故此，今將論文結集出版，以饗社會大眾。

# 目　錄

總序／星雲

序——《佛學研究論文集》出版緣起／慈惠

**日文部份**

001 世界人類の平和と共生／前田惠學

013 太虛大師の人間仏教／鎌田茂雄

**中文部份**

029 唯識法門看生命的實現
—唯識派心理學及其在諮商輔導上的應用／鄭石岩

059 正法重輝的曙光
——星雲大師的人間佛教思想／陳　兵

115 人間佛教是當代佛教的主流／賴永海

133 晚唐五代敦煌佛教轉向民間佛教的世俗化特點／鄭炳林

163 人間佛教的界說與人間正道的實踐／方立天

175 佛教的人文精神與人間佛教／樓宇烈

185 後人間佛教的建構／周慶華

211 佛光山人間佛教的管理思想／郭冠廷

233 佛教教學對現代教育的啓悟之探索／釋慧開

## 英文部份

267 Roar of the Lioness: A Women's Revival in Humanistic Buddhism
— A Case Study of Fo Guang Shan / Shih Yifa

289 Emperor Asoka Dharmavjiaya(Conquest by Righteousness) and its Affinity with Humanistic Buddhism / Ananda W.P. Guruge

327 Buddhism and the Digital Age / Lewis Lancaster

335 Positive Effects of Humanistic Buddhism on Social and Individual Development in Taiwan, South Africa and The United States / Richard L. Kimball

373 A Proposal for Experimental Application of Humanistic Buddhism to Psychotherapy and Counseling / By Dr. Thich An-Hue

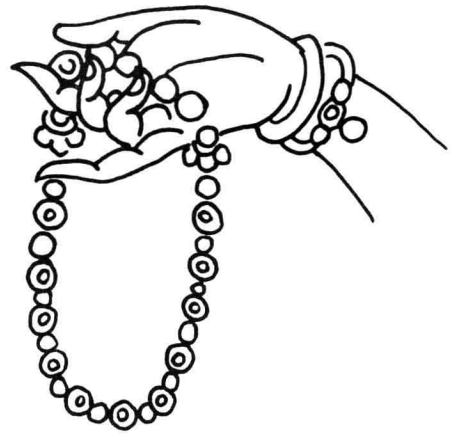
403 Proposing the Buddhist Nirvana State as Ontological Ultimate Noumenon
----Explaining why We Use the term Mind-Matter Monism / George S. Wang · Shu-chin Wang

419 Humanistic Buddhism: The Relevance of Buddhist Ethics / James Santucci

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

# 世界人類の平和と共生

前田恵學
巴利學佛教文化學会会長



# 一、新しい世紀の始め

私たちは、新しい世紀の始めに立っている。仏教徒にとって西洋の世紀による時代区分がいかなる意義をもつかの議論はあるであろうが、私たちは過去しばらくの間、世紀末的な世相が眼前に展開して、人々の話題となってきたように思う。

世紀末とは、分り易く言えば、この世はもう終りという考え方である。戦争や経済的恐慌、天災人災などさまざまな要因で、人心が動揺し、邪教や迷信がはびこる。

私は、二〇世紀の世紀末的現象は、一九七二年に発表されたロ―マクラブの『成長の限界』から始まったと思う。そこでは、地球上の人口の爆発的増加、耕地と食料の不足、資源の枯渇。自然破壊と環境汚染によって、世界人類の滅亡が近づいたという不安を呼んだ。地球上の人類は、宇宙船地球号の上に乗り込んだ一蓮托生の運命共同体であることを思い知らされた。

日本でも台湾でも大地震が頻発し、台風や水難の被害を受けた。国際的にはソ連邦が崩壊し、世界の各地に地域紛争が續発したし、アジアには経済不況が起き、産業の空洞化やバブルで動揺して、未だに立ち直ることができていない。

このように挙げてくると、世紀末的現象はようやく出そろった感があり、多くの人々が新しい二十一世紀への期待を抱いていたことは、それなりに自然の流れであった。しか

し二十一世紀においても、難問が山積しており、安易な期待の許される情況にないことは、誰が見ても明らかである。

## 二、共生の時代

宇宙船地球号で運命共同体となった私たちが、新しい時代を切り開くためのキーワードとして、日本で広く支持されている言葉に「共生」（living together）がある。共生の語をタイトルにもつ書物だけでも、すでに百数十冊にも達するという。一時は、テレビや新聞でこの言葉を見たり聞いたりしない日はなかった。

最近まで私が会員となっていた日本学術会議でも、共生は大きな課題となった。日本学術会議は、日本の人文社会科学・自然科学の科学者凡そ五〇万人から選ばれた代表者二一〇名によって、学術上の進路を議する国の機関であって、学者の国会と言われている。そこで「アジア・太平洋地域における平和と共生特別委員会」が設けられ、共生の問題を大きく取りあげ、三年にわたる討議の報告も出された（一九九七年七月）。またアジア十か国の学術代表を招いた國際会議「第三回アジア学術会議」（一九九六年三月）では、私は「仏教における共生の主張」と題した特別講演を行ない好評を得た。共生の語がアジアの国々に受容されることは嬉しいことである。二〇〇五年に愛知県を会場とする万国博においても、「共生」が大きなテーマとして話題となった。

## 三、共生は本來仏教語

共生は開かれた積極的な生き方を示している。生物学にも共生（共棲）の用語があるが、ここには人間の生き方に指針を与える程の思想は見られない。最近日本の共生ブームをひき起こしたのは建築家、黒川紀章氏の『共生の思想』（徳間書店）であるという。黒川氏は一九七九年にこの言葉を使い始めた。氏は異文化の共生による未来を生き抜くライフスタイルを提唱している。しかし、共生の本家本元は、実は名古屋の先覚、仏教学者椎尾辨匡師（一八七六～一九七一年）であるとしている。つまり共生は仏教の用語なのである。

共生が仏教用語であることは、日本の国語辞典にも一般の仏教辞典にも説明がない。実はこの言葉は、椎尾師の新造語であった。その典拠は、中国唐代の善導大師の『六時礼讃』に繰り返される「願共諸衆生　往生安楽国」（願わくはもろもろの衆生と共に　安楽国に往生せん）から抜き出したものであるという。浄土教では浄土は通常、来世のことと考えているが、椎尾師はこれをこの世の理想世界として共生浄土を目指す運動を起こしたのであった。

## 四、椎尾師の共生会運動

椎尾師は浄土宗の人。一九二二（大正十一）年、鎌倉光明寺において、「共生会」を結成した。第一次世界大戦後

の、日本の社会不安と精神的動揺の中で、新しい仏教覚醒運動を発足させた。五十二人の有志が集まって六日間、第一回の結衆を行い、共生の思想と生活の仕方を学んだ。以後数年間、急速に日本全国にひろまった。二三年には、月刊誌『共生』を発刊、三一年には共生会を財団法人として積極的教化運動を展開した。しかし、第二次大戦後になって結衆や例会も思うようにできず、月刊誌の発行も打撃を受けた。戦後立て直しをはかり、七二年に椎尾師が亡くなった後、門下や信者が共生会を改組して運動を進めたが、往時の勢いはなくなった。

しかし、椎尾師の理想は、学校教育の上で実を結んだ。師は名古屋の東海学園園長を務め、林霊法師という得難い後継者を得て、二代にわたって多くの人材を養成した。『共生の思想』の著者黒川氏もその教育を受けた一人で、「椎尾先生の仏教講座を聞きながら過ごした六年間が私の思想の形成に大きな影響を与えた」と告白している。同窓生に梅原猛氏や元首相の海部俊樹氏らがいる。梅原氏の『「森の思想」が人類を救う』（小学館、平成三年）には自然との共生の思想が流れている。

## 五、科学技術の限界

明治以後、日本は「富国強兵」を国是としてきた。太平洋戦争で敗れた後は、強兵を棄て、富国すなわち経済的繁栄だけが残された道であった。日本は西洋先進国を模範と

し、まず追いつけ、次に追い越せと、走ってきた。ようやく経済大国と言われ、先進国の仲間入りができたのに、バブルの崩壊で大きな挫折を味わい、富国の道も反省を迫られた。大きな収獲は経済的繁栄が必ずしも人間に幸福をもたらさないことがわかってきたことである。

経済的繁栄の背後にあって、これを可能にしたのは、自然科学と特に科学技術の発達である。日本人はこれを西洋から学び、巧みに受容して、多くの便益を得た。これからも科学技術の発展に努めなければ、日本の国際的地位を保ち得ない、と考えられている。しかし、アジアの国々が、すぐ後から追いつき、老化して国力が弱っている日本を追い抜くことも遠くはあるまい。すでに追いつかれている分野もある。

しかも、われわれは科学技術の力によって、すでに極めて多くの利便を受けた。空を飛ぶ航空機をはじめ、海を渡る船舶、陸を走る車や電車、電気通信や冷暖房にいたるまで、人間が生きていくのに、このうえ何が必要であろうか。

確かに技術革新の波は、コンピュータ—のように、常にわれわれに対応を迫る。しかし、人間が生きていくのに本当に必要なものは何か。生きる目的をどう考えるか。今や人類は破滅への道を歩いているのに、科学技術が果たして世界人類を救ってくれるであろうか。

今日科学技術の限界はすでにはっきりしているのに、人間はあくなき欲望を捨てることができず、なおも過去の発展を夢みて、「持續可能な発展」(sustanable development)を摸索しつづけている。世界の情況は危機的であるのに、今さら「持

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com